

## 《2007年10月関西サロン報告》

【日時】10月18日(木)19:00～20:30 (→その後「サポーターズ・フィールド」にて懇親会)

【会場】大阪駅前第4ビル10F会議室

【演題】「技術、戦術の大先達 竹腰重丸を語る」

【演者】浅見俊雄(日本サッカー協会顧問)、賀川浩(スポーツライター)

【参加者(会員)】

牛木素吉郎、賀川浩、黒田和生、貞永晃二、高原渉、中曾千鶴子、名方幸彦、平田生雄、本多克己、宮明透、宮川淑人、武藤文雄、依藤正次

【参加者(未会員)】

荒木茂、伊田翔平、菊池彰人、木村裕文、後藤健生、根無陽介、根本いづみ ほか10名

注)参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書はあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

【報告書作成者】根本いづみ

### ◇竹腰重丸(たけのこし しげまる)

明治39年(1906年)2月15日大分県生まれ。昭和55年(1980年)10月6日没。

昭和4年(1929年)、東京大学卒。大正末期から昭和初期にかけて極東大会の日本代表選手(昭和5年、優勝チーム主将)昭和11年(1936年)ベルリン・オリンピック代表コーチ。昭和4年から日本サッカー協会理事、昭和23～49年(1948～74年)同協会理事長。この間にも、国際学生-競技大会選手団団長(昭和28年)メルボルン・オリンピック監督(昭和31年)など。日本サッカー協会の法人化を実現し(昭和49年)、それを期に理事長を辞任。亡くなるまで顧問。

東大では学生主事、農学部事務長、庶務課長、教養学部講師、教授を歴任。昭和42年(1967年)に藍綬褒章、昭和57年(1976年)に勲3等瑞宝章を受章。

\*\*\*\*\*

# 技術、戦術の大先達 竹腰重丸を語る

浅見俊雄(日本サッカー協会顧問)、賀川浩(スポーツライター)

\*\*\*\*\*

## ■はじめに ~賀川さんから浅見先生のご紹介~

ノコ(竹腰重丸)さんは、我々をはじめ大正末期~昭和初期にサッカーに打ち込んだ連中にとって神様みたいな人。大事な先達、大先輩でした。

浅見先生はノコさんのお嬢さんの旦那さんで、ノコさんを最も身近に知る一人。東大の後輩時代のことも含め、いろいろな話が聞けると思います。

浅見先生自身もサッカーをされていて、昭和27年1月の全国高校選手権(西宮)で浦和高校が初優勝したときのセンターハーフ(CH)。僕はその大会でラインズマンをしていました。

OBが試合に顔を出すと「お、オマエ審判やれ」と言われるような時代。それは全国大会でも同じようなもので、審判は今日のように組織化され、教育を受け、発達していませんでした。それでも、みな選手時代の経験を生かして務めたから、ジャッジそのもののレベルは高かった。それは一応、お断りしておきます(笑)。

## ■かつての憧れの人が義理の父に

竹腰。「たけごし」ではなく「たけのこし」と読みます。「ノコさん」「ノコ」と呼ばれていました。

私にとっては東大の大先輩。面識もプレーを見たこともなかったのですが、高校時代に監督やコーチから話を聞いて名前だけは知っていて、憧れていました。東大サッカー部に進んだのは、神様と言われるような凄い人がいるところでプレーしたいという気持ちもあってのこと。入学時のアンケート用紙の尊敬する人物の欄に竹腰重丸と書いたのを覚えています。

それがその後、娘さんを嫁にもらうことになる…。そんな運命もあって、これは私が竹腰のことを本にまとめなければならぬなと思っている次第です。

ノコさんについて書くことはある意味、日本のサッカー、東大のサッカーの始まり、ルーツをきちんと知ること。これはまた、現在(いま)にも繋がる話だと思います。

## ■転入した大連一中でサッカーに出会う

ノコさんは大分県の生まれで、父親の亀太郎は臼杵(うすき)藩の家老職に値する身分。家老の娘だった母親は厳しい方で、ノコさんが泣いて家に帰ったりすると「侍の子どもが！」と怒られて家に入れてもらえなかったそうです。

臼杵中学に入ってすぐに母親が亡くなる。それが原因で父親がノイローゼになり、その転地療法のために、大正8年、中学2年の夏休みにノコさんたちは父親の妹さんの嫁ぎ先・大連(中国)に行くことになる。ノコさんはそこでサッカーに出会い、また、ここでの経験がノコさんの人格形成に非常に大きな影響を及ぼします。

転入した大連一中は自立を重んじるところで、校則がありませんでした。自分で自身の守るべき規律を提出し、それを実行するという方針。なぜこんなに自由なのかと、ビックリしたほどだったそうです。

そう言えば、転入試験のときにも試験監督がいなかったそうです。2人いた受験生を教室に残し、「終了時間になったら用紙を取りに来る」と言って出て行ってしまった。

サッカーを始めたのは中2の秋。3年生の時には4年生とチームを作り、ヨーロッパから来ている外人チームと試合をしていたようです。最初はコテンパンにやられていたのが、4年生になると2-1で勝つまでになった。

## ■サッカーに打ち込んだ高校時代、月の下でドリブル練習

高校は日本に戻り、山口高等学校へ。ここで本格的にサッカーを始めます。ポジションは左サイドのインナー(攻撃的MF)。当時は各ポジションで背番号が決まっています、10番をつけていました。

高校時代から神技、ものすごいプレーを見せたらしく、「観衆が舌を巻き、日本サッカーの注目の的となった」と記事にもなったそうです。

「月下のドリブル」のエピソードも、この頃です。

ドリブルはボールを見ないでもできなければならないと、目をつぶったり、目隠しをして練習したけれど、それではバランスがうまく取れない。それで、暗い中、月下というよりほとんど暗闇でボールタッチの感覚を磨きました。

初めて会ったとき、ずいぶん姿勢の良い人だなと思ったのですが、ノコさんはドリブルするときも背すじが真っ直ぐ。前に倒れていない。ドリブルは真っ直ぐ立っていなければ、重心の真上に頭がなければならないというのが持論。これは剣道をやっていたのも影響していたと思います。

全国高等学校大会では、1年のときは決勝まで進みながら早稲田高等学校(早高)に敗れて2位。2年のときは2回戦でまた早高に負けてしまい、3年では決勝まで進んだけれど、松山高校に負けて再び2位でした。

この全国高等学校大会は東大サッカー部を作った野津(謙)さん(第4代日本蹴球協会(現・日本サッカー協会/JFA)会長)たちが企画したもので、ノコさんが1年のときに始まりました。

野津さんたちは、東大サッカー部強化のためには東大に集まってくる学生の母体である高等学校の選手を強くする必要があると考え、東大主催の高校選手権を、高師(高等師範学校)のグラウンドで開催します。

第1回大会優勝の早高は私立学校。当初は参加資格がなかったのですが、後に日本代表監督も務めた鈴木重義さんが頼み込み、出場が認められました。その優勝した早高には玉井操さん(元・日本サッカー協会副会長、関西サッカー協会会長)がいて、ノコさんと玉井さんは大学でも東大と早稲田で対することになります。

## ■サッカーの伝道師チョウ・ディンとの出会い

1923年(大正12年)9月の関東大震災後、ノコさんは蔵前の東京高等工業学校に留学していたサッカーの名手、チョウ・ディンというビルマ(現・ミャンマー)人に出会います。

震災で校舎が潰れ、しばらく授業ができなくなったチョウ・ディンは『How To Play Association Football』という指導書を自分で書き、これを買ってくれたらサッカーを教えてやると言って日本全国を巡回。ノコさんのいた山口高等学校にもやって来ました。

(ボールの)どこをどんな風に蹴るとどうなるといった基本技術の実技や理論的な説明に、ノコさんはすっかり心酔。「このとき初めて、サッカーの技術が分かった」と言っていました。

それからショートパス戦法。短く正確にパスをつなげば、ドリブルよりも効率的に相手を抜いてゴールまで持ち込むことができると知り、開眼したそうです。

ショートパスやロングパスという言葉はすでにヨーロッパから入ってきていたけれど、実際の意味は分かっていませんでした。それを日本の選手たちが理解し、ショートパスは当時の主流になっていきます。

チョウ・ディンに感銘を受けたノコさんはその後、東京まで押しかけていき、彼の家に泊まりこんでしまいます。そうして夏休み中、チョウ・ディンの全国巡回にくっついて歩いたそうです。

## ■サッカーのために医学部から農学部へ

大学は東大の医学部薬学科に進みましたが、2年に上がるときに農学部農業経済学科に移っています。薬学科は実験が多く、サッカーの遠征や練習に支障があるというのが理由。

入学したその春に極東大会に出場したので、ずっと実験に出られず、夏休みに取り戻そうとしたけれど無理でした。それで、「薬学科にいたらサッカーなんてやれない」と、ヒマな農学部への転部(再入学)を決意したそうです。

そのとき野球の名ピッチャー・東武雄(あずま・たけお)——東3兄弟の末弟で投球練習で東大の赤レンガに穴を開けたことで知られる——も誘ったのですが、東さんはもう一年頑張った。でも結局、1年遅れて農学部に移ってきたから、「オレの方が先見の明があったな」なんて威張ったそうです(笑)。

関東大学リーグの成績は、1年次は2位(3勝1分け1敗)。2年目から3連覇を達成しています。3年連続優勝の間は無敗。1年目に1つ引き分けただけで、キャプテンを務めた最後の2年間はともに5戦全勝でした。

補足すると、大学が3年間だった当時、途中で転学部(再入学)したノコさんは、東大で4年間プレーしています。野球などでは学連内の試合にでられきる年数が決まっていますが、サッカーはそのへん寛容でした。

例えば長沼健さん(JFA 最高顧問)はご存知の通り、関学でプレーしたあと中大に入って、結局6年も出場しています。

東大で6年出場した(在学は7年)岡野俊一郎さん(JFA 名誉会長)は、私が入学したときに2年先輩だったのが、最後は同じ学年で一緒にプレー。私はキャプテンを務めることになったから、「今日から岡野と呼ばせてもらいますぞ」と宣言し、その1年間は「岡野」と呼んだのですが……卒業したらまた、(呼び方が)「岡野さん」に戻っていました(笑)。

東大を出たノコさんは1929年、帝国農会(全国農業協同組合の前身)調査部に勤務しましたが、それから毎日のように大学に来て後輩の面倒を見ていました。そして東大はリーグ6連覇を果たすこととなります。当時は何かと大らかなもので、そんな毎日来るのだったらいっそ勤めたらどうだと、東大が迎え入れてくれることになりません。それで2年後には東大の運動部組織を担当する職に就き、ほどなく日本協会や体協の理事にもなりました。

## ■選手は叱責すれば伸びるもの

極東大会には、選手として3回出場しています。

1925年、大学1年のときに大阪クラブの補強選手として第7回大会(マニラ)で初出場。その後さらに第8回大会(上海・1927年)、第9回大会(東京・1930年)と連続出場しました。

第9回は、それまで連敗していた中国と初めて引き分けた大会です。当時は東大の最盛期で、東大を中心に数名を補強し、協会による選抜チームとして出場しました。大会前には2ヶ月程の強化合宿もしています。

監督は鈴木重義さんでしたが、実際にチームをまとめていたのはノコさんでした。

ノコさんは厳しい人で、特に東大生にはキツかった。東大の監督を務めていたときも、「東大生は辱めればよい」という考えだったから、褒めることがありませんでした。「お前は足が遅い」「なんだそのキックは」と、叱責すれば選手たちは頑張ると思っていたし、事実、当時の日本人は辱められることで、より一生懸命取り組みました。足が遅いとあんまり叱られるものだから、靴底に「ノコ」と書いて、それを踏みつけながら走った選手もいたそうです(笑)。

## ■短刀をながめて精神統一

極東大会でのエピソードをいくつか——。

ノコさんが短刀を見つめて精神統一をしていたという話があります。短刀は、死んだ母親の形見の懐刀。東大時代にも、大事な試合の前には下宿の部屋で刀を抜いてながめていたようです。

極東大会で同室だった後藤(鞆雄)さんは気味が悪くて眠れなかったそうですが、精神性を重視するノコさんらしい話かなと思います。

それから、日中戦で疲れ果て、神宮競技場から程近い宿舎(日本青年館)まで歩くことができず、治太さん(田辺五兵衛、後の関西サッカー協会会長)に背負われて帰ったというエピソードもあります。

あんまり重いもんだから、治太さんが背負い直そうと手を持ち替えたら、ノコさんがズルズルと背中から落ちてきた。疲れ切って眠っていたそうです。試合でそれほどまでに完全燃焼できたのも、精神統一して臨んだおかげかもしれませぬ。

そんなふうに燃え尽きるほど戦えば、たとえば昨日のU-22代表もカタールと引き分けられたんじゃないのかなあ(笑)。ノコさんが生きていたら叱咤激励していたことでしょう(注:後半ロスタイムの失点で、U-22日本は1-2の逆転負け)。

### ■ロス五輪の出場叶わず…

1930年の極東大会で中国に引き分け、ともかく日本は極東のトップに立ちました。

「次は世界だ！」となったのですが、1932年のロサンゼルス・オリンピックではIOC(国際オリンピック委員会)がFIFA(国際サッカー連盟)のアマチュア規定を認めず、サッカー競技は開催されませんでした。

ロス五輪に賭けていたノコさんはガッカリ。「もうオレの選手生命は終わりだ」と決めてしまい、それまでやらなかった酒、タバコ、コーヒーに手を出します。酒はそれから相当飲んだようで、後年は鼻が真っ赤で、いつも飲んでいような顔をしていました。

1935年(昭和10年)には、結婚もします。お見合い結婚。相手の女性の姓が珍しかったから、小野卓爾さんには「鴨脚」という字を書いてみせ、「これが読めるか」と自慢したとか(笑)。これは「いちょう」と読みます。鴨の足跡の形がイチョウの葉の形に似ているというのが由来で、景行天皇から頂戴した名前だそうです。

### ■ベルリン五輪、悩んだ末にコーチとして参加

ベルリン五輪(1936年)——日本がスウェーデンを相手に奇跡の逆転劇を演じた大会——では、ノコさんは選手を選ぶ側に回ります。

1935年の日本選手権大会では朝鮮地方代表の全京城蹴球団が優勝したのですが、朝鮮から日本代表に入ったのは早大の金容植さんだけ。東京の早大が中心となり、東大から3人、関西から2選手を補強しました。最強チームを編成した結果だったようです。

ノコさんは、自分も選手としてプレーしようかどうか、かなり悩んだようです。選手としてもまだ活躍できるだろうと思っていたのでしょう。東西OB対抗にも関東選抜として、ベルリン五輪の5年後の1941年(第12回)まで出場し続けたくらいですからね。自負もあった。それでも最後は、若い選手たちにプレーさせようと考え、自分はコーチになります。

この大会のときに日本は、知識としては知っていた新しいオフサイドルールや、3フルバック(FB)の世界レベルの実際を初めて目の当たりにします。3FBへの対応策を現地で練ることになったわけですが、非常に沈着冷静なプレーをする竹内(悌三)さんのおかげで、すんなり変更できたそうです。

残念ながら竹内さんは、後にシベリアで戦病死します。東大の黄金時代を築いたこの後輩に、ノコさんはこんな追悼文を書いています。「生物の世界では普通、劣勢淘汰されるものだが、戦場では優勢淘汰される」。つまり、戦争では優秀な人材がリーダーとなって前線に立ち、死んでしまうということです。

### ■東大のバックアップを受けサッカーに専念

終戦で生還したノコさんは東大農学部の事務長に、その後27年に庶務課長になります。本来、庶務課長というのは非常に忙しい職なのですが、東大の理解がありサッカーに専念できました。

長沼さん、岡野さんらと行ったドルトムント学生大会(1953年)のときには、2ヶ月の約束で出て行ったのに、あちこちサッカーを見てきたから、実際に帰国したのは3ヶ月後(笑)。それでも、「彼はサッカー狂だから仕方ないな」と受け入れられた。その後時間の取れそうなポストを自分で見つけて教養学部の講師に移った。私が学生時代、ノコさんの授業を取ったときも、半分くらいはいなかったですね(笑)。いつも代わりに先生、助手が授業を代行していました。

### ■インドネシアが負けないように

ノコさんは国際審判員としても活躍しました。自分では審判には不向きだと考えていたようですが、実際には結構大きな大会も裁いているし、非常に良い審判だったそうです。

最後に笛を吹いたのは、監督として行った1956年のメルボルン五輪。当時は各チームが審判を帯同することになっていたのですが、日本はまだそこまで体制が整っていなかったのでしょう。ノコさんが審判も務めることになり

ます。担当したのはソ連対インドネシア戦。もう時効だからバラしてしまいましたが(笑)、かなり前に「オレは、インドネシアが絶対負けないように(ジャッジを)した」と、聞いたことがあります。

ノコさんは戦時中インドネシアで司政官をしていたから、この国に親近感を持っていました。インドネシアは防戦一方だったのだけれど、試合は結局0-0の引き分け。「この試合を最後に、オレはもう絶対に審判はしない」。そう覚悟を決めてのことだったそうです。

### ■クラマーもオレも、言っていることは同じなのに…

デットマール・クラマーの招聘については、初めは必ずしも良い気持ちではなかったようです。なぜ日本人の指導者ではダメなのか、と。ただし、呼ぶと決まったらはしっかりバックアップしました。

クラマーは指導のプロですからね。サッカーのHow toを教えなくとも、辱めれば選手は頑張るはず、というのは違う。実際にその指導ぶりを見て、素晴らしいと思ったそうです。

それでも酒を飲むとボヤいていましたね(笑)。「クラマーも自分たち(日本人の指導者)も、言ってることはそう変わらないんだけどなあ…。選手はオレたちの言うことでは動かないが、クラマーの指示なら動く」。選手たちがクラマーに心酔していることに、少しひがんでもいたようです。

### ■「技ヨリ進ム」—技を磨くことで精神、身体を鍛える

ノコさんの信条、ものの考え方について少し——。

ノコさんは精神性を非常に重視する人でしたが、実際にはちょっと違って「技干進」(注:干は置字)という言葉を書右の銘としていました。これは大連一中時代に漢文の授業で習ったもので、「技ヨリ進ム」と読みます。

漢文の先生はそのとき、これは「技に進む」「技を進める」と読むよりは「技ヨリ進む」と読むべきだとして、“昭和の剣聖”と呼ばれた高野茂義先生を引き合いに出し、「単に技術を磨くのではなく、技術を磨くことをとおして精神を鍛錬された結果、あのように強くなられた」と説明されたそうです。

「技ヨリ進ム」と読むのは文法的に誤りという説もあったのですが、ノコさんはこの解釈を好んで使い、大連一中の同窓会誌にも書いています。

私が、東大の名誉教授で漢文の大家である竹田先生に伺ったところ、「技ヨリ進ム」の読みで正しいそうです。「技を出発点に、そこからさらに先に進める」という意味で、つまり、技というのは単なる小手先の技術ではなく、精神力、勝利への自信へと導く出発点になるということ。中核にあるのは技であり、技を鍛えることにより精神、身体を強くする。まさに「心技体」です。

### ■マレーシアでの誤診。緊急手術で九死に一生を得る

60歳をこえてから、二度の大病をしました。

一度目は東大を退官して芝浦工大の講師になった、昭和41年(1966年)の9月。大動脈瘤でした。

イングランド・ワールドカップのあと、ノコさんはムルデカ大会に回ってきて、私もその大会で審判をしていました。ある晩、ノコさんが「お腹が痛くて仕方がない」と言い出します。かなりの痛みだったのですが、一緒にいた野津さんも「小児科医だから分からないな」と言う(笑)。

翌朝、病院に行くと尿管結石の診断。お医者さんはレントゲン写真を指し示し、「この石がだんだん落ちてきて、体から外に出れば大丈夫」と説明して薬を出してくれたのですが、どうも様子がおかしい。とにかく日本に帰ろうということになり帰国。空港からそのまま病院へ行くと、その場で大動脈瘤と診断されました。

執刀してくださる予定のドクターの都合で手術を遅らせたところ、手術当日の朝に破裂してしまい、すぐさま緊急手術。バケツ一杯分の血が出ました。後で聞いたところによると、腹痛は小出血が起きていたのが原因で、触れば分かるほどのものだったそうです。あのままマレーシアで破裂していたら…。

### ■家族よりもサッカー。妻の顔を忘れても

昭和51年(1976年)、芝浦工大を定年退職した年に、今度は脳梗塞をやります。これもまた運が悪くて——。

奥さんが親戚の葬式で外出した日、ノコさんは鍵を持って出るのを忘れてしまった。雨だったから近所の家で休ませてもらうことになったのですが、カーツと頭に来たのでしょ。

脳梗塞で倒れたあと、家族の顔が分からなくなっていました。奥さんのことを近所の煙草屋のおばさんだと思っているし、娘のことも分からない。しかし私が顔を出すと「おお、浅見か」と言い、その他のサッカー関係者のことも分かる。ノコさんの脳の中はサッカーのことだけなのかと、奥さんたちは怒ったものです。

「家族よりサッカー」という話では、こんなエピソードもあります。

昭和19年(1944年)に海軍司政官としてボルネオ島に行ったノコさんは、その一番南の方の町で終戦を迎え、オランダ軍の捕虜になりました。

オランダ士官が捕虜に向かって話し始めると、「Death by Shooting(銃殺)」という言葉が耳に入ってきた。そのときノコさんは咄嗟に、それまでのサッカー人生が走馬灯のごとく思い出されたそうです。

実際にはその後に「If...」とつづき、「もしもお前たちが命令に従わなければ銃殺」ということだったのですが、とにかく、このとき考えたのは家族のことではなくサッカーのことだったと(笑)。

ノコさんは脳梗塞から4年後の1980年、74歳で亡くなりました。生きていれば今年101歳。満100歳の去年は内々で生誕100年のお祝いをしました。

家族にとっては、決して良い父親ではありませんでした。いつも放ったらかしですからね。私の家内も「サッカー関係の人とは絶対に結婚しない」と言っていたようです。それが私と結婚したのは、よほど私が良かったのか——(笑)。

## ■おわりに ~賀川さんによる補足~

日本は1917年(大正6年)に初めて国際大会(極東大会)に出場し、4年後の1921年にJFA(日本サッカー協会)を創立します。その9年後の1930年には中国と引き分け、日本は少なくともアジアのトップに肩を並べることができました。

わずか9年。度合いからいくと非常に早いレベルアップでしょう。1922、23年にチョウ・ディンからインステップキックの蹴り方を教わっていたのが、そこから9年後にはアジアではフットボールの盛んな中国とそれなりの試合ができるようになり、JFA創立から15年後のベルリン五輪では当時世界の強豪と言われたスウェーデンを相手に逆転勝ちを収める。

この15年間の歩みは、いまから考えると非常に早いものです。それに比べると、1975年から90年までの15年は一体何だったのか——。

ノコさんは、師匠がいらないなか、自分たちで技術や戦術を考え、工夫してきた時代の“サッカー狂”の親玉の一人。急成長した15年間には、ノコさんのような人が多くいた。

病気になる家族の顔は分からなくなっても、サッカーの仲間のことは分かる。そんな人間が、僕の友人にもいました。彼は意識が朦朧として子どもの顔も分からなくなっているのに、神戸一中のサッカーの記事を読むと目から涙が流れた。

大谷四郎さんの奥さんも、言っていました。「サッカーって、一体何なのですか？ 家族より大事なのですか？」。

ベルリン五輪のときには、ノコさんは自分もコーチとして派遣される立場だったのに、派遣費用として300円も寄付しています。10円でも多い方なのに、国家公務員のノコさんが300円もの大金。視察という名目で大学などから出たお金なのでしょう。本来は餞別として自分の臨時収入にしてもよいものを、全て協会に派遣費として寄付してしまう。自分はさらに大会後にイングランドに寄ってリーグ戦を観戦していたりする。面白い人ですよ。「家族を顧みないと父親」ということにはなりましたが(笑)。